

がん治療の今

3

ピロリ菌が原因

1982年(昭和57年)に、ヘリコバクター・ピロリ菌が胃内に生息していることが発見され、その後、この菌の感染が胃

どまったという報告もあり、除菌による胃がん発生の抑制効果が明らかとなった。

そのため、2013年(平成25年)2月に、ピロリ菌感染を伴う慢性胃

胃がん・内科的治療編

早期なら内視鏡で治療

がんの明確な原因となっていることが明らかとなってきた。

50歳以上では半数以上の人がピロリ菌に感染しているが、必ず胃がんになるわけではない。また、国内他施設の臨床試験によると、早期胃がんの治療後にピロリ菌を除菌治療した患者は、除菌しなかった患者と比べて、3年以内の新しい胃がんの発生数が約3分の1にと

的治療のメリットは、胃の表面だけを削り取るように切除するため、胃袋自体を温存でき、胃の機能を保つことができる。ただ、がんが体内に残つては大変なので、病変が胃の内側表面だけに限局し、周囲のリンパ節などに転移を起していないことについて、術前にきちんと評価することが重要となってくる。

もし、切除治療が不可能と分かっていても、胃がんの分野でも各種抗がん剤による治療が急速に進歩してきている。例えば、

胃がんの中に、糖タンパクの一種「HER2」と呼ばれる成分が多く含ま

る場合には、この成分と結合する抗体薬剤(分子標的薬)を使用することにより、有意な生存期間の延長が得られるようになった。

また、各種補助治療の進歩によって、多剤併用治療も可能となり、以前よりも確実に治療成績は改善してきている。

また、個々の患者さんの病状を的確に診断し、

その状態に合わせて、もっとも有効な治療方法、薬剤などを選択することが、私たち医療者の重要な役割といえる。

また、内視鏡検査で胃がんが見つかった場合、病変が粘膜に限局される早期胃がんならば、内視鏡的治療が可能だ。内視鏡

を用いて、病変を一括してはがし取る「粘膜下層剥離術」を積極的に実行している。13年度は計37例の早期胃がんをこの方法で内視鏡的に治療し、良好な成績を上げてい

る。

また、確実に胃がんを切除する目的で、内視鏡的に使用可能な高周波メ

製鉄記念室蘭病院・藤井重之消化器内科長

また、個々の患者さんの病状を的確に診断し、その状態に合わせて、もっとも有効な治療方法、薬剤などを選択することが、私たち医療者の重要な役割といえる。



早期胃がんの内視鏡治療のイメージ図。胃の表面を削り取るように切除するため、胃の機能を保てるメリットがある—出典・オリンパスメディカルシステムズ株式会社